

# ふるさとの歩み

第5回

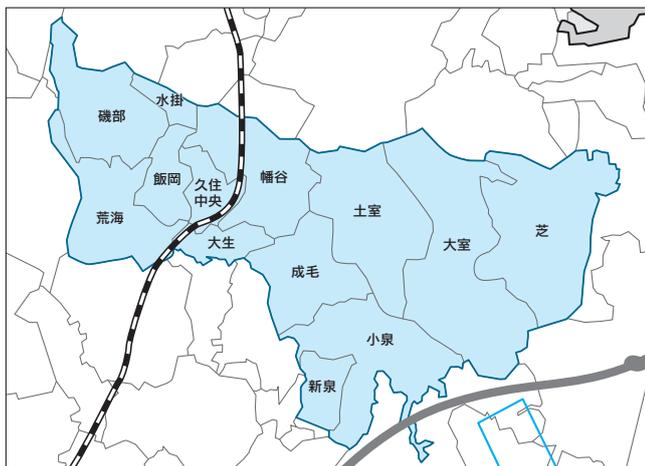
～成田市をつくった町と村～

「ふるさとの歩み」では、「成田の地名と歴史—大字別地域の事典—」の刊行に合わせ、現在の成田市を構成する旧町村の歴史を紹介します。同書は、市立図書館と市役所1階行政資料室で頒布(価格=2,500円)しています。

※「成田の地名と歴史—大字別地域の事典—」について詳しくは市立図書館(☎27-4646)へ。

## 久住村

## 肥沃な土地で磨かれた耕作技術



### 村の設立

久住村は明治22(1889)年、荒海村・磯部村・飯岡村・水掛村・大生村・幡谷村・成毛村・小泉村・土室村・大室村の10カ村が合併することで誕生。村役場は幡谷に置かれました。

### 村の産業と篤農家・桧垣仲次郎

産業は農業が中心で、総戸数の9割を農家が占めていました。磯部で農業に従事していた桧垣仲次郎は、明治末期から大正期にかけて県農会などが大いに喧伝した篤農家で、大正7(1918)年には「成功農家10人」の一人に選ばれています。仲次郎は、倹約や廃物利用などを進めることで経営の合理化を図り、小作地を拡大。大正6(1917)年には田畑3町1反9畝を所有するに至り、農地の大規模経営を実現しています。また、そうした経営手腕に加え、積極的な研究に基づく優れた麦作技術などが経営の成功を後押ししていたようです。大正期には現在の市域でも、こうした農地の大規模経営化を進め、自家消費分などを除いた余剰農産物を大量に販売して現金収入を得る、半ば商品生産者化した農家が現れるようになっていました。

### 編集後記

9月25日に行われた「永島敏行と稲づくり体験教室」の稲刈り。これは、種まきから稲刈りまでを体験する催しで、参加者は育苗箱を家に持ち帰り、田植えの日まで苗を育てたそうです。当日は外国人の参加もあり、鎌を持って稲を刈り取る様子がなんとも不思議な感じ…。「食育」が叫ばれて久しいですが、自分で育て、収穫したお米を味わうことができたことは、子どもたちにとって教室での勉強とは違う意義があったのでは？食文化を維持することの大切さが、この体験で実感できたことと思います。

平成23年10月15日号 No.1205

成田市のホームページ <http://www.city.narita.chiba.jp>



久住村役場。石造りの門柱は、現在も久住公民館付近に残されている(「成田の歴史アルバム」より)



現在の門柱

### 北総英漢義塾と大生斯文塾

土室村では明治17(1884)年、県会議員・小倉良則が自宅地内に英学研究所(後に北総英漢義塾と改称)を創設。同校では、将来官立または専門学校へ進学する人を対象に、英学・漢学・数学の3教科を教えていました。「千葉県統計白書」によれば、明治19(1886)年の同塾の教員は2人で、生徒は26人。翌年の生徒数は50人となっています。また、大生村で家塾を開き多くの門弟を抱えていた横田村山の子・郁太郎は明治21(1888)年、史学や数学を教える大生斯文塾しぶんこうの設立を企図しました。同校は設立には至らなかったようですが、北総英漢義塾で多くの生徒が勉学に励んでいたことと合わせ、こうした取り組みから、同地域での教育に対する熱意をうかがうことができます。



成田市役所本庁舎(行政棟、議会棟、消防本部、成田消防署)はISO14001の認証登録を受けています。